第一次入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

２０２５．１．８

〔問題一〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

京の町屋が、このごろ人気をよんでいる。古くからつづくタウンハウスだが、そこでくらす人は、もうあまりのこっていない。①生活の器としては、しだいに末期をむかえだしている。しかし、その町屋をブティックやカフェとして再利用するところは、ふえてきた。町屋めぐりをたのしんでいる観光客も、少なくない。

杉本家住宅のように、博物館としてひらかれている町屋もある。同家は、京都の下京で三百年近くつづいてきた。今も、綾小路新町にある邸宅で、りっぱな町屋だが、そのくらしをたもっている。生活の様子もかいま見え、カフェなどに改装されたところより、よほど見ごたえがある。古民家の愛好者などにも、ひろくすすめたい。

さて、その杉本家住宅を、若いころ私もおとずれたことがある。一九七七年のことで、まだ博物館にはなっていなかった。一般にはA門戸をひらいていないその私邸へ、ぜんぜん面識のない私はあがりこんでいる。

そのころ私が在籍していた京都大学建築学科の上田篤ゼミは、町屋の研究にいどんでいた。杉本家住宅の建築も、しらべるリストに、はいっている。そして、私は調査をさせてもらうための挨拶に、同家へおもむくようもとめられた。御宅の写真撮影と測量をさせていただきたいのですが、よろしくおねがいいたします、と。

あらかじめ電話をかけて、訪問の約束ができた日に、私は同家をたずねている。初対面の九代目当主、故杉本秀太郎氏とも、会うことができた。こちら側の依頼ごとも、過不足なくつたえている。杉本氏も、ア調査の件は、こころよくひきうけてくれた。

ただ、私のしゃべる②京都弁らしい言葉づかいが、どこか気になったせいだろう。杉本氏は、こんな質問を私にぶつけてきた。

「君、どこの子や」

たずねられた私は、こたえている。

「嵯峨からきました。釈迦堂と二尊院の、ちょうどあいだあたりです」

この応答に、杉本氏はなつかしいと言う。嵯峨のどこが、どう想い出深いのか。杉本氏は、こう私につげた。

「昔、あのあたりにいるお百姓さんが、うちへよう肥をくみにきてくれたんや」

若い読者は、「肥」のことをごぞんじだろうか。念のため、説明をおぎなっておく。

二〇世紀のなかばごろまで、日本には人の糞尿を肥料とする農業が、のこっていた。もっとくだいて言えば、ウンコとシッコを肥やしにつかう農業が、である。

田畑とむきあう農家の人々は、しばしばその肥料をもらうために、町へでむいていた。そして、各家でゆずりうけた糞

尿を、畑地の肥溜めにもちかえったのである。町の家々にある便所からくみとり、しかるべき容器へいれかえ、B荷車ではこびながら。もらいうけることのできた家には、イ畑でとれた野菜などを、謝礼がわりにおきそえて。

まだ、下水道も水洗便所も、ひろまってはいなかった。浄化槽などの用意がある家も、ほとんどない。都市部の家でも、便所の下には糞溜をもうけ、自家の糞尿をそこへたくわえていた。ときどき、それをひきとりにきた農家のことも、どこかではありがたがった時代である。

どうやら、嵯峨の農家も綾小路新町あたりまで、やってきていたらしい。もちろん、一九七〇年代末にそのCカンコウはなくなっていた。だが、私にも杉本氏の回想を、リアルなDそれとしてうけとることはできている。我が家の近くにある畑でも、一九六〇年代ごろまでは、肥溜めがのこっていたのだから。

「うちへよう肥をくみにきてくれた」。この言い方は、いちおう［　　］の気持ちもこめたかのように、くみたてられている。「きてくれた」という以上、表面的にはそううけとらざるをえない。

だが、そこに＊揶揄的なふくみのあることは、いやおうなく聞きとれた。嵯峨の子か、田舎の子なんやなと、そう③念をおす物言いであったことは、うたがえない。私は、はじめて出会った＊洛中でくらす名家の当主から、＊いけずを言われたのである。

こちらに何か、落ち度があったせいだろうか。気づかぬあいだに、失礼なことをしでかしてしまったのかもしれない。それで、あんなことを言われたのではないかと、はじめのうちはなやんだりもした。

その後、洛中の人々とも出会うことがふえ、私は考えをあらためている。とにかく、みんな④中華意識が強い。嵯峨あたりの人間なんて、見下されるのはあたりまえやないか。私にむかい、そうどうどうと言いはなつ者もいる。

けっきょく、杉本氏も洛中の人だったのだとうけとめることにした。ようするに、私は田舎者よばわりをされたのだ、と。

なにか不手際があったのではないか。当初、そう思いわずらった自分の純情が、あとからふりかえるといたたまれない。まあ、それも洛外そだちの田舎者らしい、素朴なところではあったのだが。

ほかにも、あとで気のついたことがある。たとえば、杉本秀太郎氏が高名な著述家であることも、初対面の私は知らなかった。『洛中生息』（一九七六年　みすず書房、のち、ちくま文庫）は、私が杉本家を訪問した、その一年前に刊行されている。読書人には評判の高い随筆集である。そして、そういったことどもがわかってきたのも、何年かたってからであった。

『洛中生息』……。ずいぶん、いやみったらしい標題である。洛外生息者の私は、この四文字を見るだけで、ひがみっぽくなってしまう。

しかし、くやしいが、そこにおさめられた文章は、みなあざやかである。言葉のつらなりが時に絵画的な、またしばしば音楽的な快感を、読み手にあたえる。その手練は、名人芸と言うしかない。

九代にわたる京都ぐらしが、ああいう文芸を熟成させもしたのだろうか。京都という街じたいが、その意味では芸の［a］になっていたのかもしれない。いっぽう、私の故郷では、同じ京都からほんとうの［a］をもらい、農耕にいかしてきた。そだった環境がまったくちがうことを、かみしめる。

（中略）

嵯峨の住民は、洛中人士からさげすまれてもやむをえない。うぬぼれの強い京都人からは、しばしばそうさとされたと、さきほど書いた。

この話を、他地方の読者はうたがうかもしれない。ほんとうに、京都の人は、＊てらいもなく自分の優越感をふいちょうするのか、と。

もちろん、そうあからさまにしめさない人もいる。みながみな京都自慢のプライドを、鼻先にぶらさげているわけではない。だが、はっきりと、くぎをさすかのように、洛中の優越ぶりを語る人もいる。

たとえば、今はなき梅棹忠夫氏がそうだった。

あれは、一九九〇年代のなかごろであったと思う。私は、国立民族学博物館の顧問になっていた梅棹氏の執務室を、おとずれた。学問の歴史に興味のある私は、＊碩学たちにしばしば昔話をたずねることがある。梅棹氏のところへおもむいたのも、そんな取材のためである。

やりとりのなかで、私は杉本秀太郎氏の嵯峨観にも、言いおよんでいる。そして、梅棹氏にも問うてみた。

「先生も、嵯峨あたりのことは、田舎やと見下したはりましたか」

あまりためらいもせず、西陣で生まれそだった梅棹氏は、こうこたえてくれた。

「そら、そうや。あのへんは言葉づかいがおかしかった。僕らが中学生ぐらいの時には、まねをしてよう笑いおうたもんや。ウじかにからこうたりもしたな。杉本秀太郎がそんなふうに言うのも、そら、しゃあないで」

嵯峨の住民は、言葉づかいがおかしかった。これは、愛宕なまりのことをさしている。今は京都市の右京区に編入されている嵯峨だが、かつては京都府愛宕郡にぞくしていた。そのしゃべり方も、京都弁とはいくらかちがっていたらしい。梅棹氏には、それがたいそうこっけいに聞こえたという。

ざんねんながら、一九六〇年代以後の嵯峨にそだった私は、愛宕なまりがつかえない。あのあたりは、もうすっかり京都弁のとびかう地域になっていた。私の口調も、京都風のそれにそめあげられている。

ひょっとしたら、杉本氏も、そこが［b］にさわったのかもしれない。この子は嵯峨の出だと言いながら、京都風にし

ゃべりかけてくる。ひょっとしたら、自分のことも京都人だと、心得ちがいをしているかもしれん。ここは、ひとつ、念をおしといてやろう。ええか君、嵯峨は京都とちがうんやで……。

嵯峨者のくせに、京都弁をあやつるのは、身分Eフソウオウである。お前たちはお前たちらしく、愛宕なまりですごせばいい。ある世代までの京都人たちは、心のどこかにそんな想いを秘めている可能性がある。梅棹氏の回想を聞かされた私は、うらみがましく、そこまで空想をふくらませた。

国立民族学博物館の展示室には、エ日本全国の方言を聞かせてくれる装置が、おいてある。地名のしるされたボタンをおせば、土地の古老がお国言葉で、童話の「桃太郎」を語りだす。同じ桃太郎の話で、各地の方言が聞きくらべられるしかけになっている。

見れば、「京都府京都市」というボタンもある。まさかと思いながら、私はそこをおしてみた。すると、装置からは、なじみのある梅棹氏の京都弁が聞こえてくる。「むかし、むかし、あるところに……」、と。

梅棹氏は、国立民族学博物館の設立者であり、初代館長でもある。「京都府京都市」というボタンも、当人じしんの提案でもうけられたのだろうか。あるいは、梅棹氏に＊おもねった誰かが、もちかけた話なのかもしれない。

全国の方言がまんべんなく録音されたこの装置に接し、多くの来館者は思うだろう。お国言葉に優劣をつけない、公平かつ民主的なしかけであると。 c をかぶったとしか言いようのないそんな見かけの裏に、私は京都人の中華思想を読む。ここには、嵯峨をあざけった西陣の選民意識がひそんでいる。そう大声をあげ、他の来館者たちにもつたえたくなってくる。

私の友人に、中京の新町御池で生まれそだった男がいる。今のべた装置の話をしたところ、おどろくべき返答が帰ってきた。

「京都を西陣のやつが代表しとるんか。オ西陣ふぜいのくせに、えらい生意気なんやな」

西陣あたりがえらそうにふるまうのは、＊かたはらいたいと言う。いやはや、京都はこわい街である。⑤この男は、嵯峨のことをどう見ているのかと考え、少々おちこんだ。三十数年来の友情が、 d をたててくずれたように感じたのは、この時である。

（井上章一『京都ぎらい』より）

＊揶揄的な＝皮肉めかしてからかうような。　＊洛中＝京都市内のこと。「洛外」は京都郊外のこと。　＊いけず＝いじわる。
＊てらいもなく＝見せびらかそうという意識もなく。　＊碩学＝その道の権威とされる大学者。
＊おもねった＝気に入られようとして、相手の機嫌を取ろうとした。　＊かたはらいたい＝おかしくて見ていられない。

（一）　═線部A「門戸」、B「荷車」の読みをひらがなで答え、C「カンコウ」、E「フソウオウ」を漢字に直しなさい。

（二）　═線部D「それ」と同じ用法のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　相手がどう思っているかをそれとなく探っておく。
イ　それ見たことか、言った通りになったじゃないか。
ウ　今お使いでないなら、それを貸してください。
エ　きみの発言とぼくのそれは同じではない。

（三）　a　に入る語を本文中からぬきだしなさい。ただし、a　は本文中に二つあります。

（四）　b　、c　、d　に入る語を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくりかえし使ってはいけません。

ア　幕　イ　癇　ウ　泥　エ　腹　オ　紙　カ　音　キ　顔　ク　猫　ケ　煙　コ　皮

（五）　═線部①「生活の器としては、しだいに末期をむかえだしている」について、

〈Ⅰ〉「末期」の読み方は二通りあります。それぞれひらがなで答えなさい。

〈Ⅱ〉「生活の器としては、しだいに末期をむかえだしている」とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人々の生活の様式が変わっていくにつれて不便な点が多くなり、住居としては使われなくなっているということ。
イ　数百年もの間住み暮らしてきた人々が目を覆いたくなるような、ひどい使われ方をするようになったということ。
ウ　どこを見ても古さばかりが目につくようになり、現代の人々からは見向きもされなくなってきているということ。
エ　取り壊すより他に使う方法がないと思われていた建物の、新たな活用法について考える時期になったということ。

（六）□に入る語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　遠慮（えんりょ）　　イ　感謝　　ウ　皮肉　　エ　差別

（七）――線部②「京都弁らしい言葉づかい」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　京都に住んでまだ日の浅い若者が大人ぶって使う言葉。
イ　京都弁と呼ぶにふさわしい言葉の用い方。
ウ　日常的に使っているわけではない人が京都弁に似せて使う言葉。
エ　京都において非日常の時に登場する言葉の用い方。

（八）――線部③「念をおす」と同じ意味を表す五字の慣用表現を、本文中からぬきだしなさい。

（九）――線部④「中華（ちゅうか）意識」とは、「自国を、世界の中心にある最もすぐれた国と見なす意識」という意味です。本文中の〰〰線部ア～オの中で、このような「中華意識」が現れているものを**二つ選び**、記号で答えなさい。

（十）――線部⑤「この男は、嵯峨のことをどう見ているのかと考え」とありますが、この時作者が考えていたことについて次のようにまとめました。□にあてはまる九字の表現を、本文中の（**中略**）よりも前の部分からぬきだしなさい。ただし、句読点は字数にふくめません。

「この男は、私のことを『□だ。』と思っていたのだ。」

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

『中止だって、コンクール』

電話の向こうで、美琴がそう言った後、どう答えるのが正解だったのか。

通話を終えた今も、溪本亜紗はまだずっと考えている。

正解――なんてたぶん、ない。だけど、あの瞬間の美琴にとって欲しかった言葉、一番、心に寄り添う言葉が何かきっとあった。だけど、電話は唐突で、咄嗟に受け答えをするには心の準備ができていなさすぎた。

「え、そうなの？」

亜紗が反射的に尋ね返すと、美琴が『うん』と言った。静かな声だった。泣いたり、怒ったり、大騒ぎする感じがまるでなくて、それが美琴らしくない。

『まあ、仕方ないよね。合唱って今、一番やりにくいことになっちゃったし』

「や、でもさ」

『覚悟してたし。インターハイだってなくなって、なっちゃん、泣いてたじゃん。ダブルス組んでた先輩、今年がラストチャンスだったから』

「あ――うん」

亜紗と美琴と、今名前が出たなっちゃん――菜南子は小学校から一緒の幼馴染みだ。高校でも、クラスこそ違うけど、昼休みは去年まで中庭か音楽室に集まって一緒にお弁当を食べていた。

――去年まで、というのは①「今年」がまだないからだ。

今年――正確には、今年度。つまり、二〇二〇年度。

三月、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界的に流行したことに伴い、日本では感染予防のため小中高の学校は全国一斉休校の措置が取られた。新型コロナウイルス感染症の主な症状は発熱やせき、喉の痛み、急性呼吸器疾患等。重症化し死亡する例も世界的に多い。そのため、高齢者やAジビョウを持つ人は特に注意が呼びかけられている。

感染予防のための休校で、亜紗たちの学校は「三月」と「四月」がごそっと消えた。いつの間にやら一年生が終わり、亜紗たちは茨城県立砂浦第三高校の二年生に進級したらしい。五月になっても、まだ限られた登校日にしか学校に行っていないから、全然実感が湧かないけれど。

『バド部はさ、うちの高校強豪だし、特になっちゃんは去年、一年だけど県大会で結構いいところまで行ったから、悔しくて当然だと思う。それに比べたら、うちの部は別に強豪ってわけじゃないし、コンクール、出られたとしても上位に

は食い込めなかったと思うから、こんなことで落ち込むのも図々しいのかもしれないけど』
「そんなことないでしょ。だって」
『あ、あと、さっき、うちの先輩がクラスのグループLINEで中止のこと書いたら、放送部の子に、めっちゃクールなこと書かれたって言ってた。「私たちにとったら〝コンクール〟って放送コンクールの意味なのに、合唱は扱い大きくていいよね」って』
「え！　それ、クールっていうか……」
『放送コンは先月にはもう中止の決定、出てたんだよね』
「そうだったんだ」
　電話の向こうから、美琴の小さなため息が聞こえた。
『まー、仕方ないよ。放送コンと合唱コン、a主催団体が一緒だからさ。放送の方は早々に中止が決まったのに、なんで合唱だけ特別なの？　って思ってたんじゃないかなぁー。同じこと、甲子園とかも言われてるよね。インターハイ中止になったのに、野球だけ特別なのか？　みたいな』
「うちは野球部、ないけどね」
『うん。でも、あったら、そういうこと、言われたりしてたのかな』
　亜紗たちが通う砂浦第三高校は五年前まで女子校だった。五年前から、県の学校Bサイヘンだとかで共学化され、男子の入学も可能になったのだ。――と言っても、それまで長く女子校だったイメージが強いせいか、男子生徒は全校でもたった十二人で、亜紗の学年にも三人しかいない。甲子園を目指す野球部もない。
「いつになったら、学校、普通に毎日行けるのかな」
　亜紗が思わず言うと、②それまで沈んだ雰囲気だった美琴が、かかっと笑った。
『なんかうちら、後の世に〝コロナ世代〟って呼ばれるのかもって、テレビで言ってたよ。コロナで休校になって、勉強も遅れちゃう世代だから』
「後の世って、美琴さぁ」
『ねえ、知らんよね。この後にどう歴史になるかなんて関係ない。うちらには今しかないのに』
　言葉に詰まった。美琴が軽い声で『あー、あー』と呟く。
『なんで、うちの代なんだろ』
　美琴は気づいているだろうか。たったその二音だけなのに、美琴の長い『あー、あー』は、亜紗や菜南子や、他の子たちと違う。発声練習でずっとそうしているくせなのか、腹式呼吸のおなかから出ている感じがする。歌うようなその感じ

が、亜紗は好きだ。③好きだと思っている自覚すらなかったけど、今、気づいた。
『天文部はどうなの？　学校再開したら、活動ありそう？』
美琴からふいに聞かれ、亜紗は「わかんない」と答える。
「綿引先生とも新学期はまだ一度も会えてないし。夏の合宿までにコロナが収まっててくれるといいけど」
言いながら、なんだか後ろめたい気持ちがこみ上げてくる。コンクールがなくなった美琴にしてみたら、天文部の合宿なんて、遊びみたいに思えるかもしれない。
けれど、美琴が言った。
『できてほしいな。天文部、b屋外だし』
呟くような言い方だった。亜紗はまた言葉に詰まる。思いがけない言葉だったからだ。うまく返せずにいると、電話の向こうで、美琴が誰かに呼ばれる気配がして、『はあーい』と返す声が聞こえた。
『ごめん、ママだ。亜紗、急に電話してごめんね。また今度』
「あ、うん」
『次の登校日にまた話そうねー。あ、会ってもあんまり話しちゃダメなんだっけか。ま、いっか』
電話越しに美琴が笑う気配がして、ＬＩＮＥの音声通話が切れる、トゥン、という音がした。
通話を終えてからも、スマホをベッドに投げ出して、亜紗は仰向けになり、ずっと考え続けた。どんな言葉をかけたら、よかったんだろう。
亜紗はもともと、すぐに言葉が出てくるタイプじゃない。その場で気の利いたことを言える瞬発力が高い同年代の子もたくさんいるけど、ＬＩＮＥでも返事にゆっくり時間をかける方だ。だから今も、文章で来てたら、何か気の利いたことを返せたんじゃないか、と考えてしまう。
だけど――。
クリーム色の天井を見つめながら、気づいた。
普段は文章のやり取りが中心で、電話も「かけていい？」ってまずはＬＩＮＥで聞いてくるはずの美琴が、急に電話してきた。それこそが、美琴の今の気持ちそのものなんじゃないか。
電話で聞いたばかりの、親友の言葉を耳の奥から拾い集める。
――まあ、仕方ないよね。
――覚悟してたし。
――うちの部は別に強豪ってわけじゃないし、

――こんなことで落ち込むのも図々しいのかもしれないけど。

思い出したら、そうか、と思った。図々しい、の前。美琴は、たぶんものすごく落ち込んでいる。

自分に言い聞かせるようにしていたたくさんの言葉は、ひょっとすると、合唱部の他のメンバーとの会話の中で出たものもたくさんあるのかもしれない。みんなが、互いの言葉を言い聞かせるように自分のものにして、無理矢理にでも納得しようとしている。

合唱だけ特別、甲子園だけ特別、という話題が出たのもそうなのかもしれない。特別なんてないって、言い聞かせている。だけど、美琴も――今、この瞬間、うちの高校にはないけれど、どこかにいる全国の野球部の人たちだって――、誰も自分たちが特別かどうかなんて考えてないはずだ。④そんなことを思う間もなく、三月からはもうずっと、私たちは決められたことに従うしかなくて、考える自由なんてなかったのに。

「分断が進むなぁ……」

口から勝手に呟きが出た。分断。この言葉も、三月以降、テレビとかネットで多く使われるようになって、亜紗の日常に降りてきた言葉のひとつだ。学校が休校になっていたのと同じ時期、世界のあちこちでも大規模なロックダウンがあり、さまざまなイベントが中止、Cエンキを余儀なくされた。国と国とが入国制限を行い、皆が家にこもる日々は、これまで誰も経験したことがない未曾有の事態で、つまり、今いる人類の誰もどうしていいのかわかっていない。正解がない中で、さまざまな意見があり、対立もまたある。

⑤胸がぎゅっとなる。天文部の合宿は、亜紗が、とても楽しみにしているものだった。夏と冬、年に二回あって、茨城県北の天文台を有する研修センターで行われる。亜紗の家の周辺や学校の屋上でも星は見られるけれど、山の上の研修センターからの眺めは格別に素晴らしくて、去年初めて参加できた時には、心の底から天文部に入ってよかった、と思った。

ベッドに寝転んだまま顔を横に向けると、勉強机が見えた。座ると目に入る高さに、望遠鏡の設計図が貼ってある。亜紗たちが去年から取り組んでいる望遠鏡作りのプロジェクトは、順調にいけば、今年のうちに完成するはずだった。天文部の活動は確かに屋外だけど、望遠鏡作りは地学室でやる屋内作業だから、今後どうなるかはまだわからない。

屋内作業で密閉状態になるのがダメとか、飛沫が飛ぶ活動が最もよくないとか、今年の初めには誰も知らなかった〝常識〟が、この身に沁み込んでいる。距離を取るとか、マスクをするとか、人と会わない、とか、初めは、「嘘でしょ？」って思うくらいナンセンスな対策だと思った。だって、相手も自分も感染していないかもしれないのに、それなのに互いを避け合ってるって、なんかシュールでおかしくない？　って。

だけど、それくらいしか、自分たちが今できることはないらしい。あとは、アルコールによるこまめな消毒。手洗い。大真面目な話、感染してるかどうかが自分たちですらわからないこの病気を前にしては、そういうC地道でシュールな方

法で対抗するしかないらしい。
集まらないこととか、歌わないことも、そこでは重要になる。起こらないかもしれないけれど、起こってしまう可能性を最初から潰すことができるのなら、それに越したことはないから。
ゆっくりと時間をかけて考えて、次の瞬間、がばっと跳ね起きる。
コンクールが中止になった友達に、かけたい言葉。
電話しようかと思ったけど、残る形になってほしくて、美琴にＬＩＮＥを送る。
『悲しみとかくやしさに、大きいとか小さいとか、特別とかないよ』
すぐには返せなかったけど、たぶん、亜紗はこういうことが言いたかった。強豪だから悲しむ権利があるとかないとか、そういうことでもない。だって、誰とも比べられない。
すぐに言えなくてごめん、と念じていると、すぐに、美琴から既読がついた。返事が来る。
『ありがと』
それからすぐにもう一文。
『亜紗に会いたいな』
会いたい、という言葉が、こんなに意味を持つようになるなんて。スマホを握りしめて、亜紗は静かに深く、息を吸い込む。
学校に行きたい、なんて気持ちが自分の中にあるなんて夢にも思わなかった。

（辻村深月『この夏の星を見る』より）

（一）　═══線部Ａ「ジビョウ」、Ｂ「サイヘン」、Ｃ「エンキ」を漢字に直しなさい。

（二）　═══線部ａ「主催」、ｂ「屋外」、ｃ「地道」の読みをひらがなで答えなさい。

（三）　═══線部①「『今年』がまだない」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　新型コロナウイルス感染症の世界的流行にともなって、屋内に人が密集することが禁じられていたため、亜紗が在籍している高校でも長期間にわたる休校措置をとっていた。

イ　亜紗が通っている高校では、新型コロナウイルス感染症の流行が終息するまでは新年度の開始日を遅らせるという方針を定めていたので、五月になった今も昨年度が続いてた。
ウ　新型コロナウイルス感染症が流行したため、亜紗たちが在籍している高校では感染予防の措置として年度末から休校が続き、今も断続的にしか登校できない状態が続いていた。
エ　亜紗が通っていた高校でも、新型コロナウイルス感染症の予防対策として長期にわたる臨時休校を続けていたので、例年なら新学年が始まる四月の一ヵ月が全く無駄になった。

（四）　――線部②「それまで沈んだ雰囲気だった美琴が、かかっと笑った」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　美琴は自分の所属している合唱部が出場するはずだったコンクールの中止を知って落胆していたが、亜紗の言葉をきっかけにして、自分たちがコロナ世代と特別に呼ばれるようになるかもしないといわれているのを思い出し、つい大笑いしてしまった。
イ　合唱部の活動がない日が長く続き、暗くなりがちだった美琴は、亜紗との会話でようやく明るさを取りもどし、学校の再開が待ち遠しくなるとともに、自分たちがコロナ世代と呼ばれるようになる未来を想像して、不意におかしさがこみあげてきた。
ウ　合唱コンクールが中止になり、これまでの努力が無駄になってしまったという思いに駆られて落ちこんでいたが、会話の途中で亜紗が学校の再開について話しだしたのをきっかけにして、思いがけず緊張がゆるみ、美琴は久しぶりに笑うことができた。
エ　自分たちが出場することになっていたコンクールが中止になり気力を失っていた美琴は、亜紗に電話で話を聞いてもらうことはできたが、期待していた言葉が聞けなかったうえに、世間では自分たちをどう言っているかを思い出し、笑うよりほかなかった。

（五）　――線部③「好きだと思っている自覚すらなかったけど、今、気づいた」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　休校期間中は電話でしか友人と会話できずにいたので、しだいに友人たちの声の違いが分かるようになり、合唱部で身につけた腹式呼吸によって出している美琴の声が特に好ましいものであることに気づいた。
イ　長期にわたる休校が始まる前までは美琴の声が好きだなどと考えもしなかったのに、日常が一変してしまった今、彼女の言葉を電話を通して注意深く聞いていたことで、他の誰とも異なる魅力的なものであったことに気づいた。
ウ　休校のために長い間会っていない美琴の電話を通して聞こえてくる声が沈んだ調子だったので心配になったが、その後彼女がふとつぶやいた声は、それまでの声とは違って明るさをふくんだ歌っているような声であったことに気づいた。
エ　長期にわたる休校が続くうちに、それまではまったく気にしていなかったいろいろなことに関心が向かうようになり、以前は特に好きというわけでもなかった美琴の声が実は美しい響きをもつものであったことに気づいた。

（六）――線部④「そんなことを思う間もなく～考える自由なんてなかったのに」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大会やコンクールの中止決定までに時間がかかったのは、野球や合唱が他の活動に比べて人々の関心が高いからだということを、実施の可否を決める大人たちから教えられていなかったので、私たちは不服に感じながらこれまでの休校期間を過ごしていた。

イ　中止の決定が遅かったということだけで、特別に扱われていて不公平だというようなことを言われた部活動もあったようだけれども、そう言われた人たちもふくめて私たちは皆、言われたことをそのまま受け入れるより仕方がないと思いこんで、休校の続く日々を過ごしていた。

ウ　学校が休校になってしまったせいで、私たちが目標にしていた大会やコンクールが次々に中止になったが、部活動によって中止の決定が違うことについて、不平等だという不満を持つ部活動も現れ、私たちの間に分断が生じてしまったのに、その解決策を考える自由は奪われたままだった。

エ　合唱部や野球部ではコンクールや大会を中止にしないための努力が長く続けられていたのに比べ、放送コンクールやバドミントンの大会などは早い段階で中止の決定が出されてしまい、私たちには中止を回避するために、どんな努力をしたらよいのかを考える機会は与えられていなかった。

（七）――線部⑤「胸がぎゅっとなる」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　美琴が電話で言っていた言葉を思い起こしながら、親友として何を言うべきか考えていたが、天文部の夏の合宿がどうなるかはまだ決まっていないということを思い出すと、それに続いて昨年初めて参加した時の楽しさが胸にこみあげてきた。

イ　美琴に気の利いた言葉をかけてやることができなかったことを後悔し、美琴が話してくれていたことを思い出しているうちに、いつのまにか世界中に広まってしまった分断という事態に思いが至り、身の引き締まる思いに襲われている。

ウ　美琴との会話を終えてから、彼女が心の中で葛藤していることについて考えているうちに、自分たちに起きていることもまた同じであることに思いが至り、天文部の合宿も今年は中止になるかもしれないと不安になり、切なさが募っている。

エ　美琴との会話が終わり、疲れを感じてベッドに仰向けになっていると、いろいろな思いが胸の中にわき起こり、最後に分断という言葉がつい口から出たことに驚き、私たちの生きる世界の未来について不安を感じ、急に心細くなっている。

〔問題三〕次の文章は、問題二の本文に続く部分です。これを読んで後の問いに答えなさい。

休校が始まった三月の頃には、コロナのニュースをやっていても、休校は本当に念のためにそうするという程度の大げさな対応のような気がして、不謹慎かもしれないけど、ちょっとラッキー、とすら思っていた。卒業式を控えた先輩たちは大変かもしれないけれど、期末試験はたぶんなくなるだろうし、これまでも学校に通いながら、もし、長く家にいていいならこんなことやあんなことがしたい、と夢想していたことがたくさんあったからだ。あの本が読みたい、あのゲームをクリアしたい、あのドラマのシリーズだって、時間が取れるなら一気に観られる――。

そんなわくわくでいっぱいだった、はずなのに――。

「友達とも会わないこと」と学校から通知が来ても、それくらい、ＬＩＮＥや電話あるし、平気でしょ、と思ってた。ゲームだって、通信でつなげるし。

だけど、四月の終わり頃、夜になって、亜紗は自分が眠れないことに気づいた。

d布団に入って、たとえうつらうつらしていても、急にぱっちり目が冴えて、そうすると、頭の中に突風が吹き抜けて、着ている服が一枚一枚はぎとられていくようなイメージが止まらなくなる。

今のこの日々は、いつかは、絶対、〝いつも通り〟に戻る。

ゆるぎなくそう信じているのに、なのに、眠れない。ここで私ひとりがじたばたしたところで何も変わらないのに、焦る。どうしてだろう。考えたって悩んだって、何も変わらないのに。

ああ、昨日、家の裏の公園で小学生の男子たちが遊んでた。あの子たちの小学校は休校中に友達と会ってもいいのか。サッカーしてて、距離、近かった。ひとりはマスクをしていなかった。なんだかすごくモヤっとして、ズルいって、そう思った。

苦しい。とても苦しい。

「亜紗、どうしたの」

普段は亜紗がベッドに入ったら絶対に様子なんて見に来ないはずの母が、どうしてか、その日、ドアを細く開けて、声をかけてきた。

「なんか、眠れなくて」

寝返りを打ちながら答えると、母が中に入ってきた。「そっか」と呟くように言って、普段よりゆっくりしたスピードで、亜紗に語りかけた。

「何か不安？」

「あー」
親になんか頼る年じゃない。そう思っていたし、自分でもどうして眠れないのか、その時までわかっていなかったのに、気づくと、次の瞬間、答えていた。
「学校に行きたい」
言ってしまってから、自分で驚いた。もう一言、声が出る。
「友達に会いたい」
嘘でしょ、と自分で思った、私、学校に行きたいとか、友達に会いたいとか、そんな素直でまっすぐなキャラじゃない。たとえ、そう思ったんだとしても、間違ってもそれを親に言うとか、そんなタイプじゃなかったのに。
母の顔が一瞬、驚いたように固まる。だけどすぐ、亜紗の体があたたかい腕にくるまれた。
「会いに行きな。明日、美琴ちゃんや菜南子ちゃんに連絡して、公園とか、河原とか、どこでもいいから」
「いい。会わない」
「どうして？」
「だって――今は、自粛だから」
言うと同時に、ぼたたたー、と涙が流れた。自分でも止めるのが追いつかなかった。日本語として言い方がおかしかったかもしれないけど、もう、言葉の意味を見失っていた。本来はどう使うべきものだったのか。自粛とか、不要不急とか。〝不要不急じゃない〟という言葉は、結局、急いでる時に言うの？　それとも急いでない時？
「亜紗」
母が息を呑んだ。そのまましゃくりあげるくらいまで一気に泣いてしまった亜紗の肩をさすりながら、「いいんだよ」と大きな声で言った。
「自粛は、自分でコントロールしていいんだよ。本当は、誰かに言われてすることじゃなくて、自分で決めていいの」
「でも」
「亜紗は、我慢強くて、ひとりで溜めこんじゃうから」
母が亜紗の手のひらをさする。指を全部、自分の手の中に包んでくれる。
「学校、行きたいよね」
母が言った。亜紗の頭のすぐ横で頷いてくれる。そうしたら、亜紗も、こくん、と頷いていた。
勉強がすごく好きなわけでもないし、部活だって、そこまで熱心にやっていた、という自覚もなかった。家で過ごすのも得意な方だと思っていたのに、限界は急に来た。

「みんなに会いたい」
亜紗は言った。
その時は結局、母に勧められるまま、翌日、美琴と菜南子と、連絡を取って会った。驚いたのは、去年、二人と同じクラスだった天文部員、飯塚凛久まで待ち合わせの河原に現れたことだ。うちの学校では珍しい男子生徒のひとりであり、亜紗にとっては唯一の同学年である部員。
二月まで部室でしょっちゅう会っていた懐かしい顔を前に、思わず叫んだ。
「うそぉ、凛久！　どうしたの？」
「いや……。なんか、誘われて」
見知った顔の下半分にマスク。でもマスク以上に目を奪われたのが――。
「てか、え？　何事よ、その髪の毛。げ、あとピアスしてる？」
「いやー、ちょっとイメージチェンジを暇つぶしに」
「何やってんだ、この非常時に」
休校前は黒かった髪が茶色く染められ、耳にはピアスが嵌まっている。休み明けにそんなふうになる子は中学でもいたけど、まさかこのコロナ予防の休校でそんなことをする奴がいるなんて――と呆れつつ、⑥でも、なんだかほっとして、気が抜けた。
凛久のことは、去年同じクラスだった菜南子が誘ったらしい。「よかったー」と少し離れた場所から彼女が美琴と笑う。
「亜紗が元気ないならと思って飯塚くんも誘ってみたけど、よかった。二人、相変わらず仲良くて」
学年で男女ひとりずつの部員ということでカップルのように見られてからかわれることはこれまでもあって、「仲がいい」と言われるたびにげんなりしてきたけど、この時ばかりは懐かしさと再会の嬉しさが勝ってしまった。美琴たちにはDキガルにできた連絡が、凛久には男子相手だからと遠慮がちになっていたこと、本当は連絡したいと思っていたことも初めて認められる。キラキラ輝く水面を横に、四人が四人とも、照れくさいのを通り越して、互いを見る目がいつもと違った。瞳孔が開いたような、そういう、「あ、会えた！」っていうEコウフンの顔。みんな、ふぁーってアドレナリンが出ているのが、マスク越しでもわかる。
「いやー、本当にひさしぶり」
「わあー！　本物の亜紗と美琴だ、嬉しいな」
「会いたかった」
「私もだよー」

誰がどれを言ったのかわからないくらい、みんな、同じ言葉を繰り返していた。わあー、会えた。○○だ、本物の○○だ、とただ名前を呼ぶ。普段、ちょっと斜に構えた感じのある凛久も、「え、で、結局今日の集まりの目的って何？」と言いつつ、でも、嬉しそうだった。

手を触れあえないし、ソーシャルディスタンスだし、マスク越しだけど、みんな、コウフンしていた。

そんな、会えなかった期間を経て、学校が週に一度程度の登校日を作り始めたのは、今月――五月に入ってからだった。週に一回、半日だけの学校は、クラスを三分割したe分散登校で、美琴や凛久とは違う時間帯だけど、それでも嬉しい。先週は、ちょっと時間が長くなって、お昼近くまで学校で過ごすことができた。

もうすぐ、緊急事態宣言が終わる、と、ニュースで言われている。宣言の前に、インターハイとか、合唱コンクールとか、いろんなものの中止はもう決まってしまったけれど。

「早く、学校、いつも通りになるといい」

亜紗は呟く。

だけど、その「いつも通り」の中には、もう美琴のコンクールや菜南子の大会は含まれていない。個人の力ではもはやどうにもならない。だから、思ってしまう。これがもう普通みたいになっちゃってるけど――。

私たちの状況って、今、すごくおかしいよね？

（八）　線部D「キガル」、E「コウフン」を漢字に直しなさい。

（九）　線部d「布団」、e「分散」の読みをひらがなで答えなさい。

（十）　線部⑥「でも、なんだかほっとして、気が抜けた」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　コロナ禍の中で多くの人々が自粛を強いられ、さまざまなことを制限して暮らしていたというのに、天文部員の凛久がそういう社会の風潮にとらわれることなく自由に過ごしていたことを知り、今までの自分が間違っていたことに気づき、むなしい気分になった。

イ　コロナ対策の休校措置のあいだ、亜紗は我慢(がまん)ばかりしてきたのに、自分と同じ天文部員の凛久は休校が続いているのを逆手にとって、髪を染めたりピアスを付けたりと自由に過ごしていたのを知って、追いこまれていた気持ちが消え去ったような気分になった。

ウ　コロナ予防の休校を利用して、ふだんは我慢していたことに挑戦(ちょうせん)してみたという凛久の前向きな考えにふれて、休校が始まってからの自分はただ自分に我慢することを強いていただけだったということがわかり、本来の自分を取り戻(とりもど)したいという気分になった。

エ　コロナ感染が終息するきざしさえ見えない中で、皆が暗い気持ちになりがちだったことを心配していた凛久が再会の日に合わせてイメージチェンジをして現れ、私たちを驚かせてくれたことに友情のありがたさを感じて、久しぶりに明るい気分になった。

（十一）　〜〜線部「これ」がさしていることを三十字以内で答えなさい。ただし、句読点も字数にふくめます。